



Title	<書評>白波瀬達也著『宗教の社会貢献を問い直す : ホームレス支援の現場から』
Author(s)	岸, 政彦
Citation	宗教と社会貢献. 2015, 5(2), p. 95-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

白波瀬達也著

『宗教の社会貢献を問い直す——ホームレス支援の現場から』
ナカニシヤ出版、2015年4月20日、四六判、264頁、3,500円（税別）

岸 政彦*

釜ヶ崎を歩くと、私が学生だった20年以上前とは、様変わりしていると感じる。昔はこのあたりは、肩が当たっただけで「コラァ」となるような、そういう地域だった。しかし今ではずいぶん人数も減り、高齢化して、静かな「福祉の街」になっている。それでもやっぱり、この街にはたくさんの「おっちゃん」が暮らしていて、たとえばゼミの学生を連れていくと、ここは動物園ちゃうぞ、おれたちは見世もんちゃうぞとヤジを飛ばされることがある。私も思わず背筋がのびる。

この街にたくさんの教会や宗教関連の人びとがいて、日常的にホームレスのおっちゃんたちに炊き出しをしたり、支援活動をしたり、そういうことを長年やっていることは、現場を知るもののあいだではもう常識になっているのだが、そこを正面から調べて書いた社会学者は、あまりいなかったと思う。社会学者の仕事は、大げさな未来予測や時代診断ではない。現場のものならよく知っているけど、外のひとには知られていないようなことを、ちゃんと調べて、わかりやすい言葉に直すこと。私はこれが社会学者の仕事だと思っている。そういう意味で本書の著者である白波瀬達也は、ほんとうの社会学者だ。

専門外の私でも、大阪に住んで、それなりに釜ヶ崎でうろついて、何人かの友人の研究者や支援活動をしている方にお話を聞いていると、釜ヶ崎で支援活動をしている宗教関連の人びとにも、いろいろなケースがあることを知る。ふつうに教会という形になっているところもあれば、もともとは何かの宗教団体の活動の一部として支援していた人びとが、母体の宗教団体とゆるやかにつながりながらも独立し、世俗的な形態で支援をおこなう場合もある。あるいは、労働運動と連携して、闘争的な活動を展開する人びともいる。白波瀬によれば、「全国のホームレス支援団体を束ねる NPO 法人『ホームレス支援全国ネットワーク』は二〇一四年の時点で七六団体九人

* 龍谷大学社会学部准教授

の個人で構成されているが、このうちの二三団体は明確に FRO（「宗教と結びつきのある組織」）であり、全体の約三〇%を占めている」（28 頁、括弧内引用者）。ホームレスを支援する団体の多くが、宗教に関わりがあるのである。

著者はまず、宗教集団による社会貢献を考えるうえで、ふたつの準備作業をおこなう。まず、宗教集団を枠をひろげ、「宗教と結びつきのある組織」（Faith-Related Organization）という概念を提示する。そしてさらに、支援活動のなかで宗教活動をおこなうか、あるいはそれに消極的かという軸と、公的機関と協働することに積極的かどうか、という軸によって、それを 4 つに分類する。つづいて、「社会貢献」という概念は限定的であるとして、より広い文脈で FRO の活動を分析するために、「社会活動・福祉活動」にまでひろげて観察することを提案している。

このようにして拡張された概念を使用して、まず釜ヶ崎におけるキリスト教系のホームレス支援活動の見取り図が描かれる。同じキリスト教系といっても、その支援活動や組織のありかたには大きな差がある。白波瀬はそれらをおおきく「運動型キリスト教」と「布教型キリスト教」に分類する。70 年代から釜ヶ崎のキリスト教系支援活動の中心だった「運動型」は、現地の労働組合と連携しながら、布教活動よりもラディカルな社会運動型の支援活動を中心に据えて活動している。90 年代に入り、釜ヶ崎がより高齢化するなかで、生活保護の支給が進んだこともあり、地域のキリスト教系支援活動は、徐々に運動型から布教型にシフトした。この、布教型キリスト教支援活動（伝道集会）の参与観察と、そこに集う人びとのインタビューで構成される第 3 章と第 4 章が、本書の中心である。

釜ヶ崎での伝道集会の様子は、非常に興味深い。エレキやドラムを使ったロック風のワーシップソングの様子や、伝道師のスピーチが紹介されている。

イエス・キリストは、ここに集まっている皆さんがいくら悪いことをやってもですね、全部愛してくださいますよ。皆さん、過去のことはね、思い出さないでください。皆さんがもし、「悪いことをやりました。本当に悪いことをやりました」って悔い改めたら、全部神様が赦してく

でございますよ。(68頁)

釜ヶ崎に流れ着いて、野宿になって、もうどうしようもない状態にまでなって、「もうアカン」、「死んだほうがマシや」と思っている人もたくさんいるでしょ？ でも…(略)…すべて赦され、救われるんですよ。

(69頁)

正直に言って、そうか、そういうことが言われているのかと驚いた。ここには、私たちの先輩の世代の労働運動家や社会学者たちが描いてきた、釜ヶ崎の誇り高い日雇い労働者の姿はない。釜ヶ崎で暮らしていることは、「悪いこと」「どうしようもない状態」なのである。そして、釜ヶ崎の人間になったという「罪」は、信仰によって浄められる。ここで提供されているのは、それまでの自分を否定し、イチから生まれ変わるための、まったく新しい世界観そのものなのだ。信仰を通じて、世界はもういちど根底から定義される。自分と世界が、それまでなかった観点から意味付けされるのである。

さらに白波瀬は、教会に集う「おっちゃん」たちへの参与観察とインタビューを通じて、おっちゃんたちの生活世界のなかで教会の活動がどのように実践的な意味付けをされているかを探る。釜ヶ崎の人びとにとって、教会とは、まず何よりも、「メシが食える場所」である。

野宿者のなかには各々の教会名を知らなくても「パンの教会」、「カレーの教会」、「どんぶりの教会」といったように、そこで出される食事の内容で識別している者もいる(80頁)

このような語りのディテールは本当に面白い。この語りは、なるほどそういうものかと、私たちに新しい視点を授けるし、確かにそういうものだろうな、という説得力がある。

しかし、いったんはその生活の文脈のなかで意味付けされる教会の活動だが、もちろんそこに参加する過程で、信仰を得ていく人びともいる。おそ

らく釜ヶ崎においては、生活と信仰は、一続きのグラデーションでつながっているのだろう。白波瀬は次のように述べる。

社会的排除の状況下にある野宿者が抱えている問題は「食い扶持の喪失」だけではない。とりわけ高齢化し、死のリアリティが高まるなか、「生の意味」が希求されやすくなるのではないだろうか（77頁）

白波瀬は、匿名性と流動性によって特徴付けられる釜ヶ崎のなかで、教会という場所は、他者とのつながりを実感できる「オルタナティブな場」であるという。確かにそこは、釜ヶ崎というそれ自身がオルタナティブな場のなかでできた、もうひとつのオルタナティブな場である。

ある野宿者の信者は、本書で次のように語っている。

だからまあ言うたら炊き出し目当てですわな。でも、それだけと違って、せやねえ、牧師とね、握手するためですわな。伝道集会に行ったら、牧師が「元気にしとったか？」って握手してくれるんやね。それが嬉しいてね。（82頁）

胸を打つ語りだ。たかが握手だが、その手は、彼にとっては自分をすくい上げてくれる命綱だったのである。

本書を読んで、あらためて釜ヶ崎は本当に変わってしまったと思った。ここはもう、私が若かったときの、暴力的なほど活気のある街ではない。ある程度、シェルターや生活保護が機能しているとすれば、もちろん貧困や就労条件の問題がそれで解消されることはないが、住民の高齢化にともなって「生の意味付け」の問題が相対的に大きくなることは間違いないだろう。その意味で、本書がこのタイミングで出版されたことは、とても重要なことである。

本書で描かれる釜ヶ崎は、これまであまり描かれることのなかった釜ヶ崎である。現在までの運動や研究を継承しつつ、まったく新しい釜ヶ崎を、宗教を通じて描くことに成功したのである。先に私は、当たり前のことをち

ゃんと言語化するのが社会学者の役割であると書いた。社会学者の役割がもうひとつあるとすれば、それは、これまでなかったような現実の言語化の仕方を見つけ出す、ということだろう。白波瀬は間違いなく、第2の務めも果たしている。

私たちはよく、ある種の情熱を持った人や集団を、宗教っぽいと揶揄することがある。確かに、宗教に関わる人びとには、こうした熱を感じる。それは、「他者への情熱」である。自分だけでなく、他者をも救済しないではいられない人びとの情熱は、宗教の本質的な部分なのかもしれない。そしてこの情熱は、社会保障や市民的連帯がことのほか貧しいこの社会において、私たちが他者とともに生きていくための希望である。他者を尊重することが、他者とのあいだに壁をつくることと同義だとされるこの社会では、この情熱は、何よりも必要なものだろう。

そして、本書の著者もまた、信仰という形ではないかもしれないが、この情熱を共有している。それは本書において記録された、長期間にわたる、真剣で骨の折れるフィールドワークに、なによりもはっきりと現れている。

量的調査では、私たちは、競合する仮説を減らしていく。質的調査において私たちは逆に、仮説、つまり世界の記述可能性を、徹底的に複数化・豊饒化しようとする。現実の別の描きかたを探すために、私たちは「現場」へと赴くのである。そのようにして私たちは、白波瀬のような現場系社会学者の目や耳を通じて、思ってもみなかった現実がすぐ私たちの傍にあることを知る。

確かに本書には、いくつかの、それも重大な欠陥がある。まず、理論的な分析が存在しない。FRO や社会活動などを概念的に類型化することは、分析のための準備作業であって、分析そのものではない。全体を通じて「現場報告」に終始し、独自に設定した問題を独力で解いていくような、スリリングな展開もない。私は、誰よりも現場をよく知る白波瀬達也には、宗教とは何か、あるいは、ホームレスでいるということほどのようなことかを、学術書の形式にとらわれず、力づくで描ききってほしかったと思う。

だが、こういうことがあった。本書でも紹介されている、沖縄のホームレス支援団体「プロミスキーパーズ」の事務所を、私自身訪れたことがある。それは著者から熱烈に、一度はプロミスキーパーズの代表と会っておくべきだと勧められたからである。事務所で、本書にも登場する山内牧師（プロ

ミスキーパーズの代表) と会ったとき、「白波瀬さんの紹介で来ました」と言ったらすぐに、「ああ白波瀬先生は、もうずっと前から、本当に何度も何度もここに来てくれています」と言われた。これほど現場で信頼されている社会学者は、他にはあまりいないかもしれない、と、そのとき思った。私たちは、彼のような社会学者のおかげで、自分たちが普段行けない、行かないようなところがどのようなものであるかを、知ることができる。宗教もホームレス支援も専門外の私にとって、本書はまさに、そのような本であった。